

パリ国立シャイヨー劇場 ジョゼ・モンタルヴォ「トロカデロのドン・キホーテ」

12月13日(金)~12月15日(日) プレイハウス

詳細はP15へ



José Montalvo Don Quichotte du Trocadéro

振付:ジョゼ・モンタルヴォ

現代のドン・キホーテはメトロに乗って現れる!?

原作はスペインの作家セルバンテスが1605年に上梓した小説で、正式タイトルは「奇想天外の郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」。騎士道物語を読み過ぎた下級貴族が、自らを伝説の騎士だと思ひ込み、お供のサンチョ・パンサを連れて遍歴の旅に出るという物語。ドン・キホーテが風車に突進する場面はあまりにも有名だ。世界中で読み継がれているロングセラー小説を基にしたクラシックバレエの名作「ドン・キホーテ」(振付:マリウス・プティバ、音楽:レオン・ミンクス)にオマージュを捧げ、スペイン出身の振付家、国立シャイヨー劇場のダンス・ディレクターでもあるジョゼ・モンタルヴォが現代のパリに甦らせる。

クラシックバレエ、コンテンポラリーダンス、ヒップホップ、タップ、フラメンコ、アフリカダンスなど、ジャンルを超えた各種ダンスにスラップ

スティックコメディ、バーレスク、映像など多彩な要素をモザイクのように散りばめた、マジカルでスペクタキュラーなモンタルヴォ・ワールド。88年からダンサーのドミニク・エルヴェと共に活動してきたが、本作は単独で手掛けた作品で、バロックオペラ「レ・バラダン」から7年ぶりの来日公演となる。

愛すべきヒーローを演じるのは、TVや映画でも活躍するコメディアンのパトリス・ティボー。ドン・キホーテが愛馬ロシナンテにまたがって登場するのは、なんとパリのメトロ。投影される映像には、実際に地下鉄のホームなどで撮影したものが使われているという。13人のキュートなダンサーたちが舞台を駆け巡り、ポップでカラフルなパフォーマンスで存分に魅了してくれること請け合

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
平成25年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
*東京文化発信プロジェクト事業

イサンゴ・アンサンブル「^{アバナヒ}プッチーニのラ・ボエーム Abanxaxhi

英語(一部コーサ語)上演・日本語字幕付き

12月19日(木)~12月22日(日) プレイハウス

詳細はP16へ



Isango Ensemble Puccini's La Bohème Abanxaxhi

演出:マーク・ドーンフォード=メイ

現代南アフリカが舞台、ソウルフルなオペラが誕生

世界各国で上演され続けている、イタリアオペラの名作「ラ・ボエーム」。1830年代のパリ、カルチェラタンで自由を謳歌し、芸術に身を捧げるボヘミアンたちを描いた青春オペラだが、このプッチーニの原作に新たな息が吹き込まれ、ダイナミックな新アレンジで南アフリカ版が誕生した。

ケープタウンを拠点に活動するイサンゴ・アンサンブルは、イギリスの演出家マーク・ドーンフォード=メイがタウンシップ(アパルトヘイトで設けられた黒人強制居住区)出身の若い役者や音楽家たちと2006年に立ち上げたカンパニー。08年の初来日公演でも好評だった「魔窟」がイギリス舞台芸術界の最高栄誉、ローレンス・オリヴィエ賞最優秀リバイバル・ミュージカル作品賞を受賞したほか、輝かしい受賞歴を誇る。

時代を現代に、舞台をタウンシップに移し、その

土地で育った若者たちが演じることで「ラ・ボエーム」がヴィヴィッドに生まれかわった。タイトルの「Abanxaxhi」は、南アの公用語のひとつ、コーサ語で「ボヘミアン」の意だとか。プッチーニが手掛けた名曲にジャズやアフリカの伝統音楽をミックスし、マリンバとスティールパンの生演奏、ソウルフルな合唱とダンスで観客の心を揺さぶる。

ところで、同じく「ラ・ボエーム」がベースのミュージカル「RENT/レント」は1989年から90年代のNYが舞台。ヒロインの名前は「ミミ」が受け継がれたが、彼女が患う病いは結核からHIVに置き換わっている。イサンゴ作品ではミミの病いは原作と同じ結核。それが過去のものでなく、いまなお身近な病気であることを訴えるため、途上国の感染症対策を支援する世界基金が本公演の大きな力になったことも付け加えておこう。

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
共催:世界エイズ・結核・マラリア対策基金/
公益財団法人日本国際交流センター(世界基金支援日本委員会事務局)

平成25年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
*東京文化発信プロジェクト事業